

普賢寺遺跡発堀調査概要・I

1990. 2

門真市教育委員会

は　し　が　き

門真市の北部は、低湿地が広がる市域の中で、比較的高くなっています。

市内に所在する遺跡は、「三ツ島遺跡」を除きすべてがこの地に集中し、高まりを利用して生活が展開されてきました。

今回調査いたしました普賢寺遺跡は、昭和59年まで大阪府教育委員会により調査されていたものを、門真市教育委員会が引き継いだものです。

調査では、弥生時代前期の土器が発掘され、市の歴史を書き換える成果があり、意義深いものとなりました。

この度『普賢寺遺跡発掘調査概要・I』を刊行するにあたり、調査にご協力いただいた関係各位をはじめ、調査に参加された方々に深く感謝いたしますとともに、今後の調査におきましてもご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成2年2月

門真市教育委員会

教育長　村田温雄

例　　言

1. 本書は、門真市垣内町549-17で計画された
店舗付共同住宅の建設に先だって実施した
埋蔵文化財発掘調査概要報告書です。
2. 調査にあたっては、高橋昭夫氏の多大な
協力を得ました。
3. 現地調査は門真市教育委員会社会教育課
宇治原靖泰が担当し、昭和60年11月25日に
着手し、同年12月12日に終了しました。
4. 本書の編集・執筆および遺物の写真撮影
は宇治原靖泰がおこない、土器観察表は宮
本順子が作成しました。
5. 調査・整理には、富田芳之、宮本順子、
国分政子、畠中順子、秋山由紀の協力を得
ました。
6. 調査・整理にあたり福田英人（大阪府教
育委員会）、梶山彦太郎の両氏よりご教示
を得ました。ここに記して感謝の意を表し
ます。

本文目次

第1章 調査の経過	1
第2章 位置と環境	2
第3章 遺構と遺物	3
第1節 土層	3
第2節 遺構	3
第3節 遺物	9
まとめにかえて	9

図目次

図1 普賢寺遺跡位置図	2
図2 西壁(上)・北壁土層断面図	5・6
図3 遺構平面図(近世)	7
図4 遺構平面図(中世・弥生)	8
図5 土壙6出土弥生土器実測図	10
図6 出土土器実測図	11

写真

写真1	遺構検出状況(近世・北から) 遺構検出状況(弥生時代・北から)
写真2	溝1完掘状況 溝1西壁断面
写真3	土壙6完掘状況 土壙6遺物出土状況
写真4	弥生土器壺 円筒埴輪
写真5	出土土器

第1章 調査の経過

普賢寺遺跡（図1）は、門真市垣内町・幸福町（京阪電車古川橋駅北側一帯）に所在する弥生から江戸時代の中世寺院跡を中心とする複合遺跡である。

遺跡は昭和58年に市立第一中学校給食棟の工事の際に大量の瓦が出土し、寺院跡が発見されたものである。

昭和59年から門真市古川橋駅北区画整理事業が実施されることになり、これに先立ち大阪府教育委員会による発掘調査が行われた。この発掘調査で寺院に関係する遺構、遺物が出土し、その他、弥生・古墳時代の遺物が出土した。

今回の調査は大阪府教育委員会の既調査地の北側に接する地で、昭和60年11月に店舗付共同住宅の建設計画がなされたため、門真市教育委員会が事業主より依頼を受け発掘調査を実施することになったものである。

調査地は建物の規模に合わせ、南北17m、東西7mの長方形に設定し、約120m²を調査することとした。残土は近くに空地があったため仮置場とした。

調査は昭和60年11月25日から同年12月12日まで行った。

調査は地表下約0.4mまで重機で盛土を除去し、以下の包含層は人力で堀削した。包含層は古墳時代から近世の遺物を含むが、中世の遺物が圧倒的に多く、瓦が多くみられた。

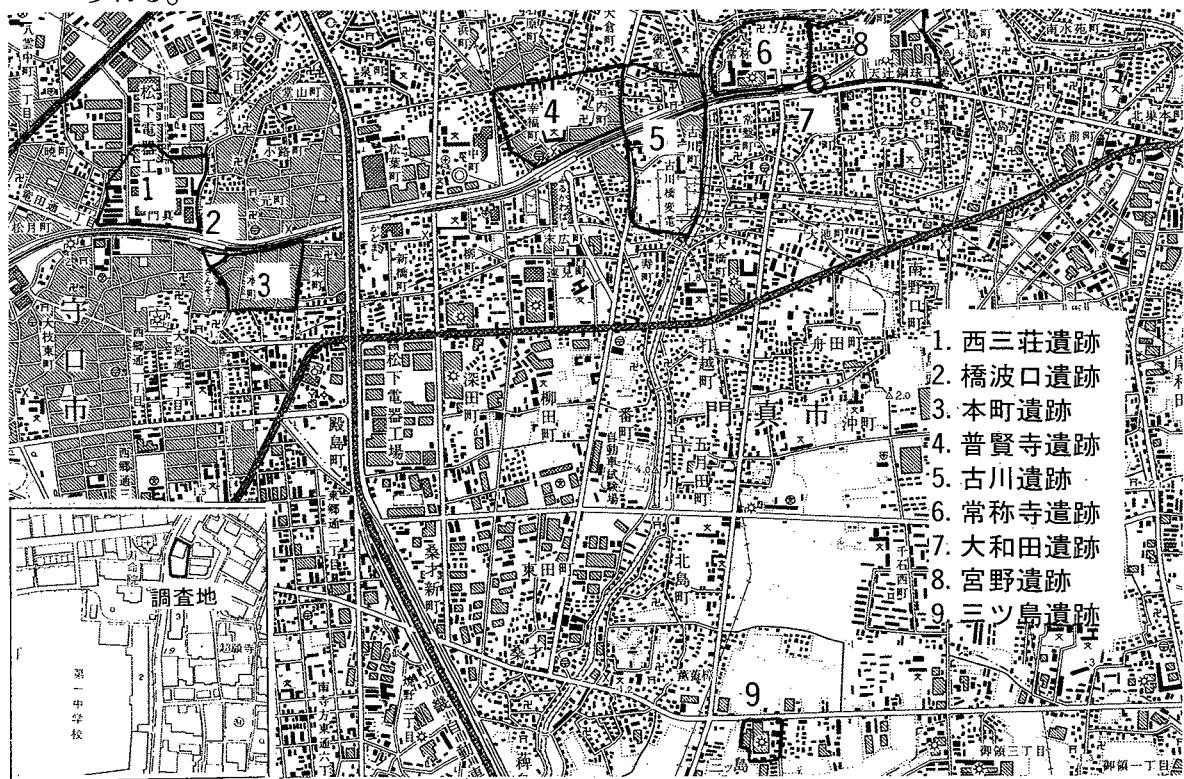
遺構は、弥生・中世・近世のものがみられたが、溝1は室町時代を中心とする瓦が多数出土し、寺院と関連ある遺構と考えられる。土壙6からは弥生時代前期の壺が出土し、門真の歴史を遡らせるものとして注目された。

第2章 位置と環境

門真市は大阪府の東北部に位置し、東を寝屋川市、西と北を守口市、南を大阪市鶴見区と大東市に接する面積 12.21km²、人口約14万人の市である。淀川左岸にひろがる低湿地に市域が含まれ、南部では現在も蓮根、くわいが生産されている。

縄文時代は、全市域が海底と考えられており、地下数メートルのところでカキ等の貝殻が出土する。大和田遺跡の銅鐸が示すように陸地化は弥生時代以降、北部から進んでいくのであるが、水はけが悪く至るところに湿地が残り、淀川をはじめとする大小の河川の氾濫による水害にしばしばまわれる土地であった。

今回調査の普賢寺遺跡は、陸地化の過程で形成された東西に延びる微高地上に営まれており、市内にある遺跡の多くはこうした微高地上にあるものと考えられる。



調査地位置図 1/5000

図1 普賢寺遺跡位置図

0 500 1000 1500

第3章 遺構と遺物

第1節 土層(図2)

第1層は盛土。第2層は耕作土。第3層から遺物が包含されている。第4層は近世の溝の埋土。第5層は近世遺構のベース面で中世の遺物を包含している。第6・14・15・19・20層は中世の遺物を包含しているが、奈良・古墳時代の遺物も含んでいる。第7・8・9・10・11・13層は中世の溝の埋土である。第16層は中世遺構のベースとなる層で、調査地全体にみられ、遺物はほとんど含んでいない。第12・17・18層は無遺物層である。

第2節 遺構

遺構は調査地の南側に集中し、溝・土壙等が検出された。

土壙1(図3)

調査地の南東端で検出した。不整形で、深さは約0.25m、土師質の小皿片が出土した。

土壙2(図3)

調査地の南端で検出した。不整形で、深さは約0.1m、土師質小皿、瓦片が出土した。

土壙3・4・5(図3)

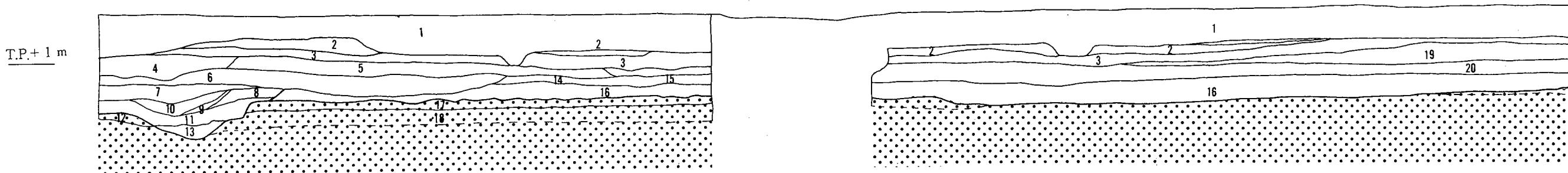
調査地の中央、南よりのところで検出した。土壙3は最大径1.65mの橢円形で、深さ0.25m。土壙4は最大径0.9mの橢円形で、深さ0.1mである。土壙5は最大径1.4mの不整形で、深さは0.2m。これらの土壙内より陶器片、土師質小皿等が出土した。

土壤6（図4）

調査地の南東隅で検出した。遺構は調査地外に延びていたため遺構全体を調査することができなかった。土坑の上面は約1.2m程の隋円形で、深さは溝1により削平を受けており約0.3mが残存していた。弥生時代前期の壺が出土した。

溝1（図4）

調査地の南と東の壁に沿うような形で検出した。幅は溝が調査地外に及ぶため明らかにはできなかったが、広いところで約4m、深さは0.6mである。傾斜はほとんど認められず、粘土が埋土となっており、水の流れはほとんどなかったのではないかと思われる。出土遺物の多くは瓦で、土師質皿、瓦器碗、天目茶碗等室町時代のものがみられた。出土遺物に余り時期差が認められないので、この溝は比較的短期間に埋ったようである。



西壁土層断面図

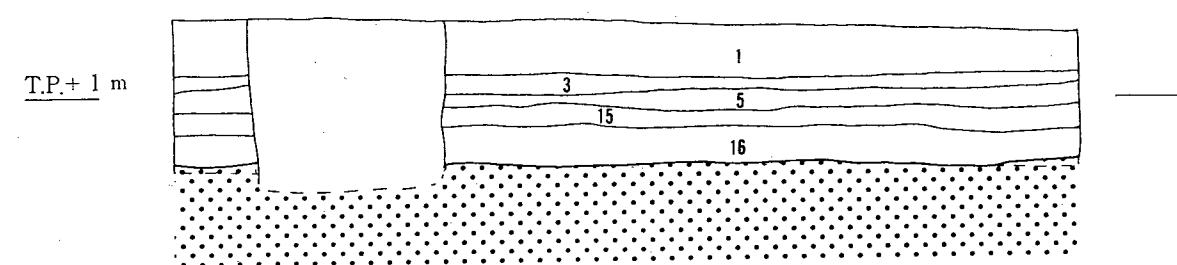


図2 西壁(上). 北壁土層断面図

- | | |
|--------------|--------------|
| 1 盛土 | 11 暗灰緑色砂混り粘土 |
| 2 耕土 | 12 淡青灰色シルト |
| 3 茶灰色シルト | 13 緑黒色粘土 |
| 4 淡灰褐色細砂 | 14 暗茶灰色砂質シルト |
| 5 茶灰色砂混り粘土 | 15 " 砂混り粘土 |
| 6 暗灰色粘度 | 16 茶灰色粘土 |
| 7 暗青褐色砂混り粘土 | 17 淡黄灰色粘土 |
| 8 緑褐色砂質シルト | 18 淡青灰色粘土 |
| 9 暗緑灰色小礫混り粘土 | 19 暗茶灰色砂混り粘土 |
| 10 暗青褐色砂質シルト | 20 緑灰色細砂 |



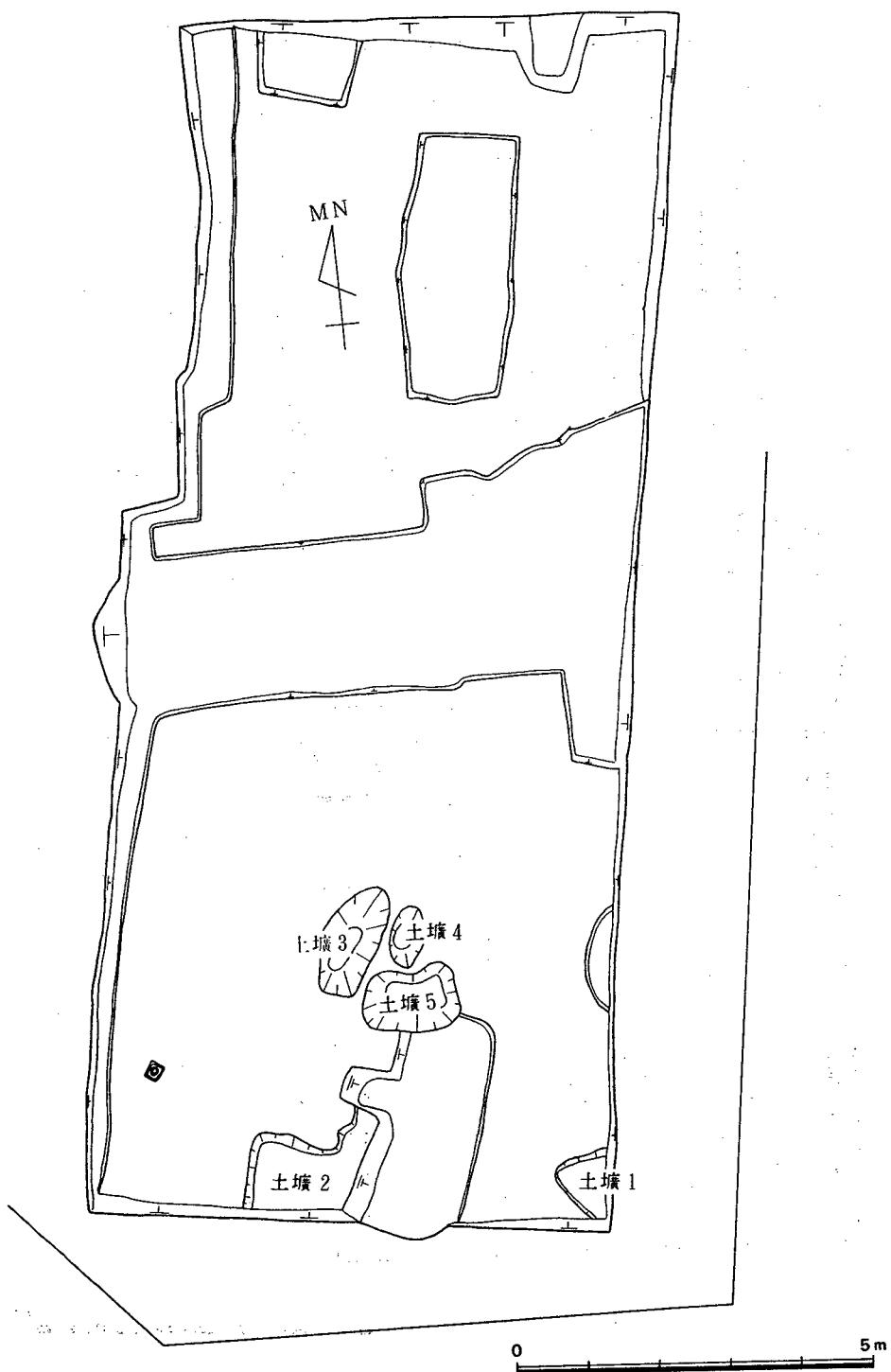


図3 遺構平面図(近世)

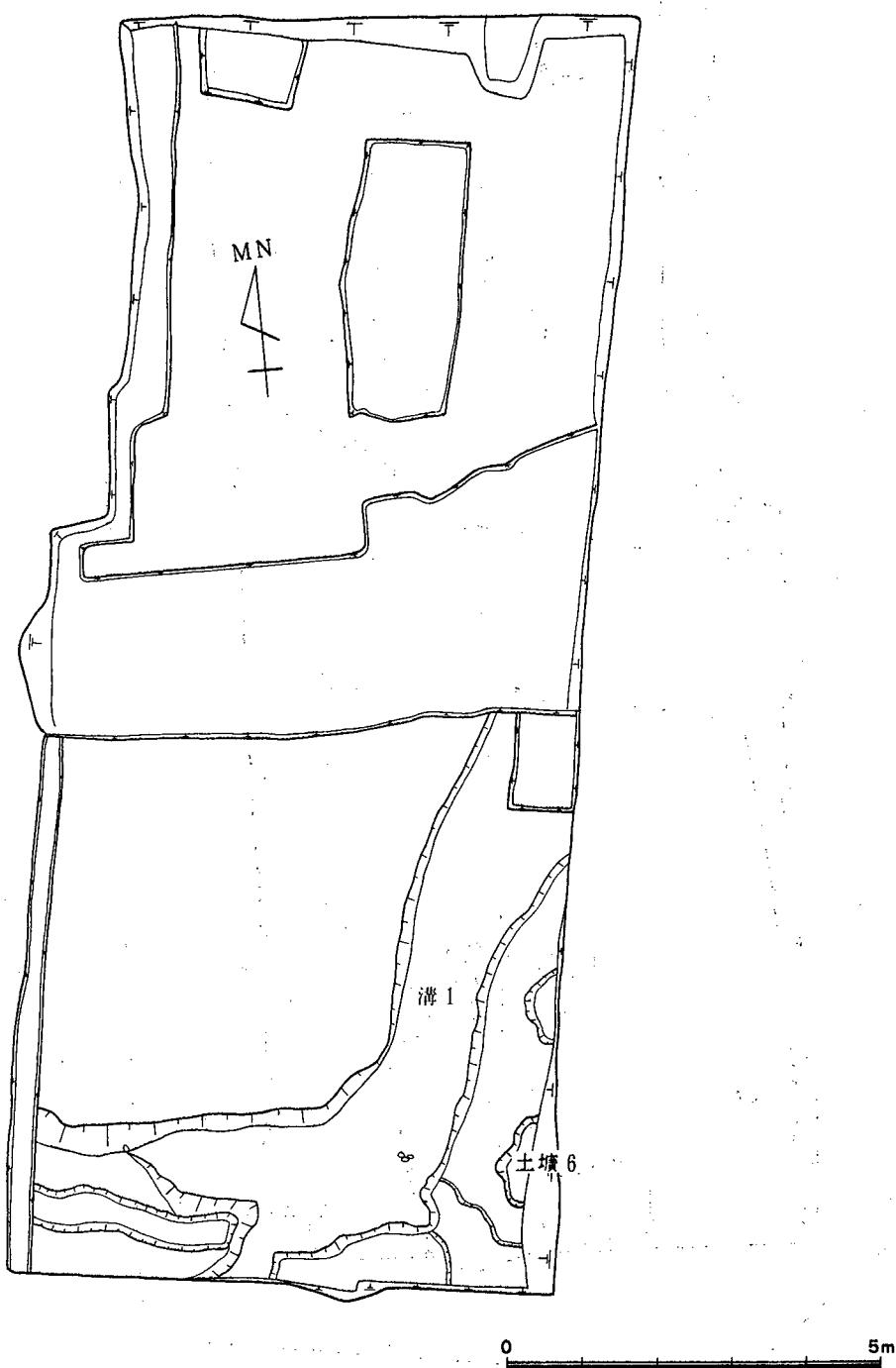


図4 遺構平面図（中世・弥生）

第3節 遺物

この発掘調査では弥生時代前期の土器をはじめ、古墳時代の円筒埴輪、中世の土器や瓦が出土した。遺物の量では室町時代と思われる瓦が圧倒的に多いが、細片が多く図化できなかった。寺院跡が近くにあることを示している。

弥生時代前期の土器はいずれも壺形土器で、口頸部、体部、底部の破片が土壙6より出土した。破片は各々別な個体と思われる。

口頸部の破片は口径34cm、器高60cm程度に復原できる。口縁端部に篦描の斜格子文、頸部に9本と3本以上の篦描沈線文が施されている。調整は口縁部外面はヨコ方向のハケ、頸部はヨコ方向のハケ、内面は口頸部がヨコ方向のヘラミガキ、頸部にヨコ方向のハケがみられる。色調は外面が灰茶色、内面は暗茶灰色、胎土は大粒で角の丸い石英を多く含み、チャートとみられる粒も微量含まれる。

底部の破片は底径12.5cm。色調は灰茶色、胎土は大粒で角の丸い石英を多く含み、チャートとみられる粒も少しみられる。調整は傷みが著しく不明である。

まとめにかえて

今回の調査では、遺跡の全容を知るには及ばなかったが、弥生時代前期にはこの付近が陸地化され、生活が営まれていたことが明らかになった。また円筒埴輪の出土は、付近に古墳が存在する可能性を示すものとして注目されるものである。

また大量に出土した中世の瓦等により、普賢寺遺跡の中心をなすものは寺院跡で、今後調査が進めば、建物跡等の具体的な様相が明らかになっていくものと思われる。

遺跡の全容をつかむためには、今後周辺の広範囲な精査が必要である。

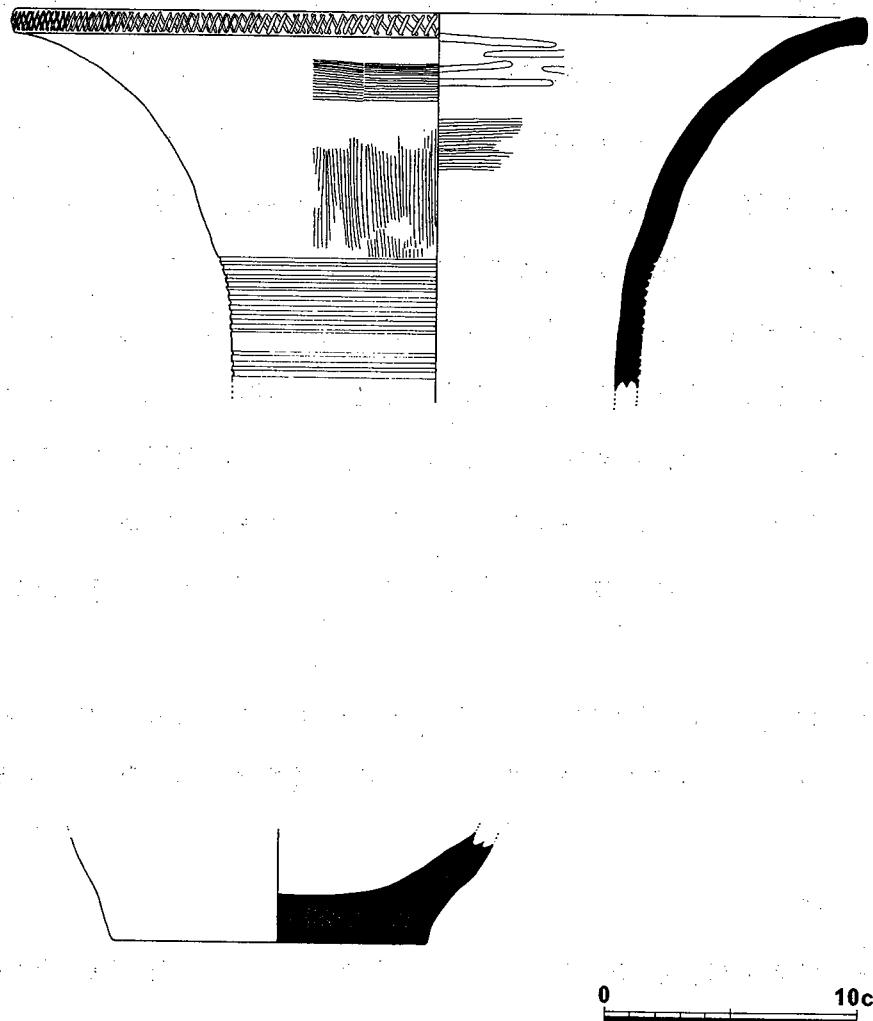


図5 土壌6出土弥生土器実測図

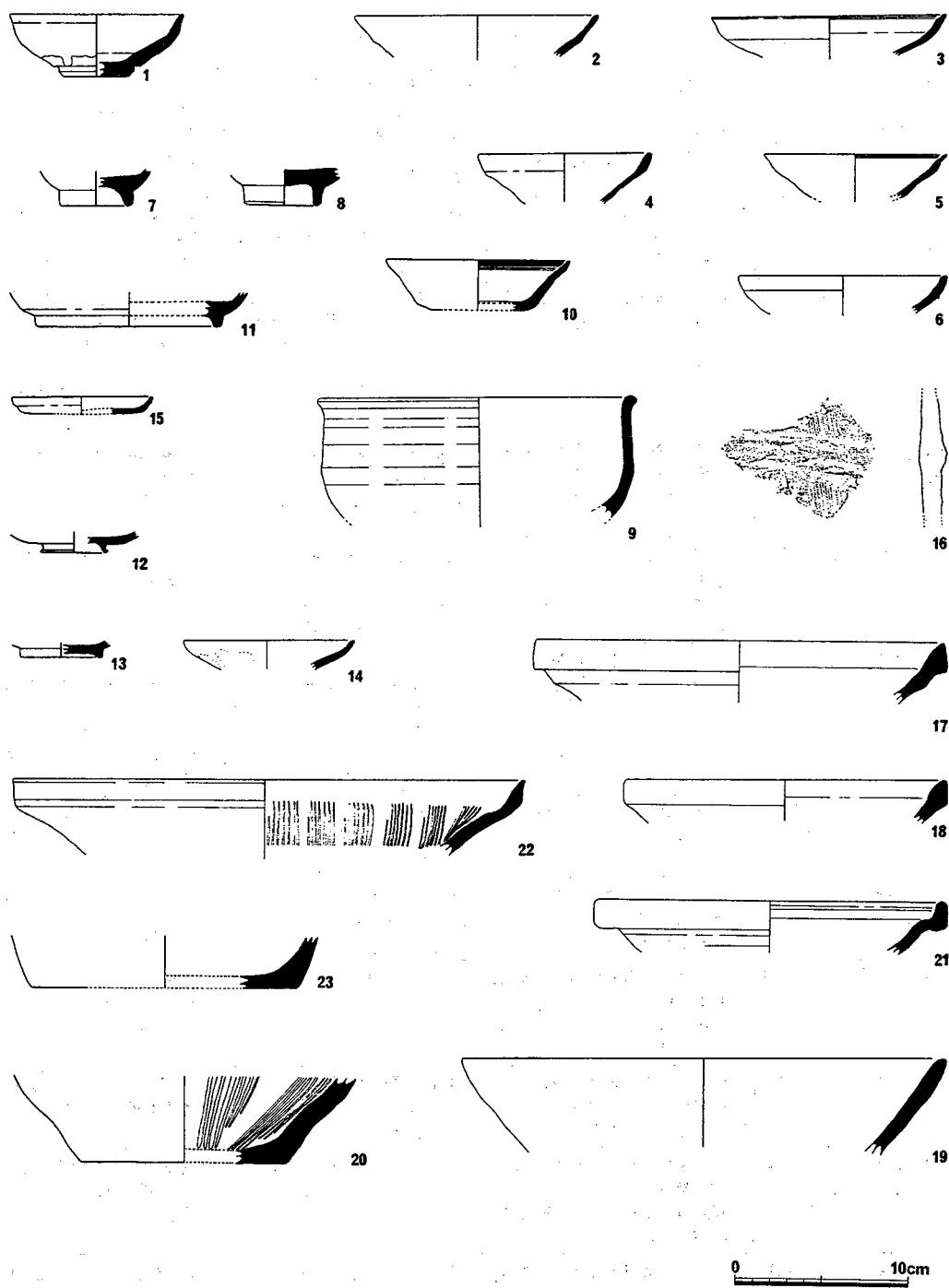


図6 出土土器実測図

土器観察表

番号	器種	器形	法量(cm)		形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土
			口径	器高			
1	瀬戸美濃天目	椀	8.2	3.6	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部は内傾ぎみに立ち上がり返りは浅く口縁部は丸くおさめる。 ◦底部高台内の中グリは浅く、平らである。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦左回転の回転ヘラ削り ◦底部は右回転の回転ヘラ削り中央部は削り ◦ロクロびきで、胴部にロクロ目が残る。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部外面・内面は茶・茶褐色の釉薬が外面底部付近を除き施される。 ◦胎土 密 灰白色ないしクリム色である。
2	瓦器	椀	14.0	不明	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部はゆるやかに内彎して立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部外面はヨコナデ、内面はヨコナデの後に粗略な暗文を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部外面・内面とも黒灰色、 ◦断面 淡灰色 ◦胎土 密
3	瓦器	椀	13.6	不明	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁近くでやや外反する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部外面はヨコナデ、内面はヨコナデの後に暗文を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦全体に黒灰色を呈するが、外面には重ね焼きとみられる炭素の吸着していない部分がある。 ◦胎土 密 径 1mm以下の砂粒を少量含む。
4	瓦器	椀	10.2	不明	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部はゆるやかに内彎した後やや内傾して立ち上がる。 ◦口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部外面は指頭圧痕 ◦口縁部近くはヨコナデ ◦体部内面はヨコナデの後に暗文を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部外面・内面とも黒灰色、 ◦断面 淡灰褐色 ◦胎土 密
5	瓦器	椀	10.6	不明	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部はゆるやかに内彎して立ち上がる。 ◦口縁部内面に一条の沈線 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部外面は指頭圧痕 ◦口縁部近くはヨコナデ ◦体部内面はヨコナデの後に粗略な暗文を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部外面・内面とも黒灰色、 ◦断面 淡灰色 ◦胎土 密
6	瓦器	椀	12.0	不明	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部はゆるやかに内彎する。 ◦口縁部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部外面は指頭圧痕 ◦口縁部近くはヨコナデ ◦体部内面はヨコナデの後に粗略な暗文を残す。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦全体に黒灰色を呈するが外面には重ね焼きとみられる炭素の吸着していない部分がある。 ◦断面 淡茶灰褐色 ◦胎土 密 径 1.5mm程度の砂粒を少量含む。
7	磁器	椀 底部	3.0	不明	<ul style="list-style-type: none"> ◦高台は高く、中グリが深い。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦調整は器全体に釉薬がかかっているため不明 	<ul style="list-style-type: none"> ◦釉色は淡青緑色で全体に薄くかかる。 ◦胎土 ち密 白灰色
8	陶器	椀 底部	4.0	不明	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部高台の中グリは深い。 ◦体部は内彎して立ち上がると推測される。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦調整は器全体に釉薬がかかっているため不明 	<ul style="list-style-type: none"> ◦釉色は淡茶色で全体に薄くかかる。 ◦胎土 ち密 淡茶色
9	陶器	鉢	17.9	不明	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部から、ゆるやかに内彎し、直線的に立ち上がる。 ◦口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ロクロで成形していると考えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部外面 淡灰黄色 ◦内面 淡茶灰色 ◦断面 淡茶灰色
10	青磁	浅鉢	10.6	2.9	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部はゆるやかに内彎して口縁部付近で外反する。 ◦口縁部は尖りぎみである。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦調整は器全体に釉薬がかかっているため不明 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部外面・内面とも淡緑灰色 ◦体部断面 淡灰白色
11	須恵器	杯身 底部	10.6	不明	<ul style="list-style-type: none"> ◦しっかりした高台がつき内ぐりも深い。 ◦底部からゆるやかに内彎して体部へと続く。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部 外面・内面ともヨコナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部 外面・内面とも暗灰色 ◦断面 暗赤褐色 ◦胎土 密
12	瓦器	椀 底部	3.8	不明	<ul style="list-style-type: none"> ◦断面が三角形で端部をややつまみ出す形態のしっかりとした高台をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部 外面内面ともヨコナデ ◦底部外面 ヨコナデ ◦底部内面に格子状の暗文がみられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦体部外面内面とも灰黒色 ◦胎土 密
13	瓦器	椀 底部	4.8	不明	<ul style="list-style-type: none"> ◦高台はV字形でしっかりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部外面 ヨコナデ ◦底部内面 ナデ、ラセン状暗文がみられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦底部 外面・内面とも灰黒色 ◦断面 淡灰黄色 ◦胎土 密

土器観察表

番号	器種	器形	法量(cm)		形態の特徴	手法の特徴	色調・胎土
			口径	器高			
14	瓦器	椀	9.8	不明	○体部はゆるやかに内彎して、口縁部は丸くおさめる。	○体部外面 指頭圧痕 ○体部内面 ヨコナデ	○灰黒色 ○胎土粗 径2~3.5mm程度の砂粒を少量含む。
15	土師質	小皿	8.1	1.0	○体部はやや内彎して立ち上がる。 ○口縁端部は丸くおさめる。	○体部 外面・内面ともヨコナデ ○底部外面 圧頭指痕	○体部 底部外面乳褐色 ○胎土 密
16	埴輪	円筒埴輪	不明	不明	○幅2.0cmの低い不整台形状のタガを有する。 ○透しは円形である。	○体部外面14本/1.5cm 単位のナナメハケ調整 ○体部内面ナデ	○体部外面 淡茶褐色 ○体部内面 茶褐色 ○胎土 密 ○径1mm以下の砂粒を多量に含む。
17	瓦質	鉢	23.6	不明	○口縁部は少し下方につまみ出す。	○体部、口縁部ともヨコナデ	○体部 暗灰褐色 ○胎土 密
18	瓦質	鉢	18.4	不明	○口縁部はやや肥厚し、外傾する面をもち、端部は尖りぎみに丸くおさめる。	○体部、口縁部ともヨコナデ	○口縁部外面 黒灰色 ○体部 外面・内面とも灰白色 ○胎土 密 径2~3.5mmの砂粒を少量含む。
19	瓦質	すり鉢	28.0	不明	○体部は連続的にたちあがり、口縁端部は尖りぎみに丸くおさめる。	○体部内面に粗い5本からなる櫛状工具でハケメをつける。	○体部 外面・内面とも黒灰色 ○胎土 やや粗
20	瓦質	すり鉢	11.8 (底径)		○体部は直線的にたち上がる。 ○平底	○体部 外面・内面ともヨコナデ ○7本からなる櫛状工具でハケメをつける。	○体部外面 黒灰色 ○胎土 密 径1mm程度の砂粒を多量に含む。
21	須恵質	鉢	20.4	不明	○口縁部は肥厚し、端部はつまみあける。	○体部 口縁部ともヨコナデ	○口縁部が黒灰色のはかは暗灰色 ○胎土 密 径1~2mm程度の砂粒を多量に含む。
22	備前	すり鉢	29.6	不明	○体部はやや内彎してたち上がる。 ○口縁はつまみあげて尖る。	○体部 口縁部ともヨコナデ ○7本からなる櫛状工具でハケメをつける。	○暗赤褐色 ○胎土 密 径0.5~3.0mm程度の砂粒を多量に含む。
23	土師質	鉢	15.6	不明	○平底 ○体部は直線的に立ち上がる。	○体部外面 ヘラ磨き ○底部 外面・内面ともナデ ○黒色の物質を塗布	○体部 外面・内面とも暗黒褐色、断面茶褐色 ○胎土 密 径1~3mm程度の金雲母、石英、有色鉱物等を多量に含む。

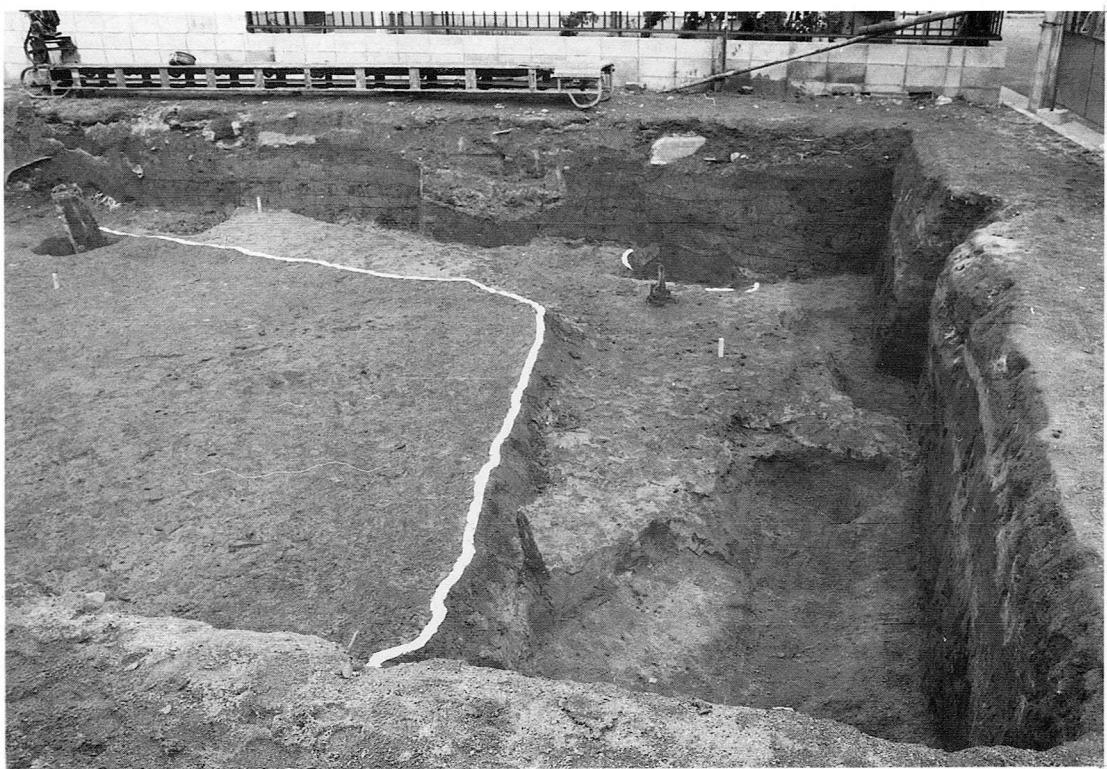
写 真



遺構検出状況（近世・北から）



遺構検出状況（弥生時代・北から）



溝2 完掘状況



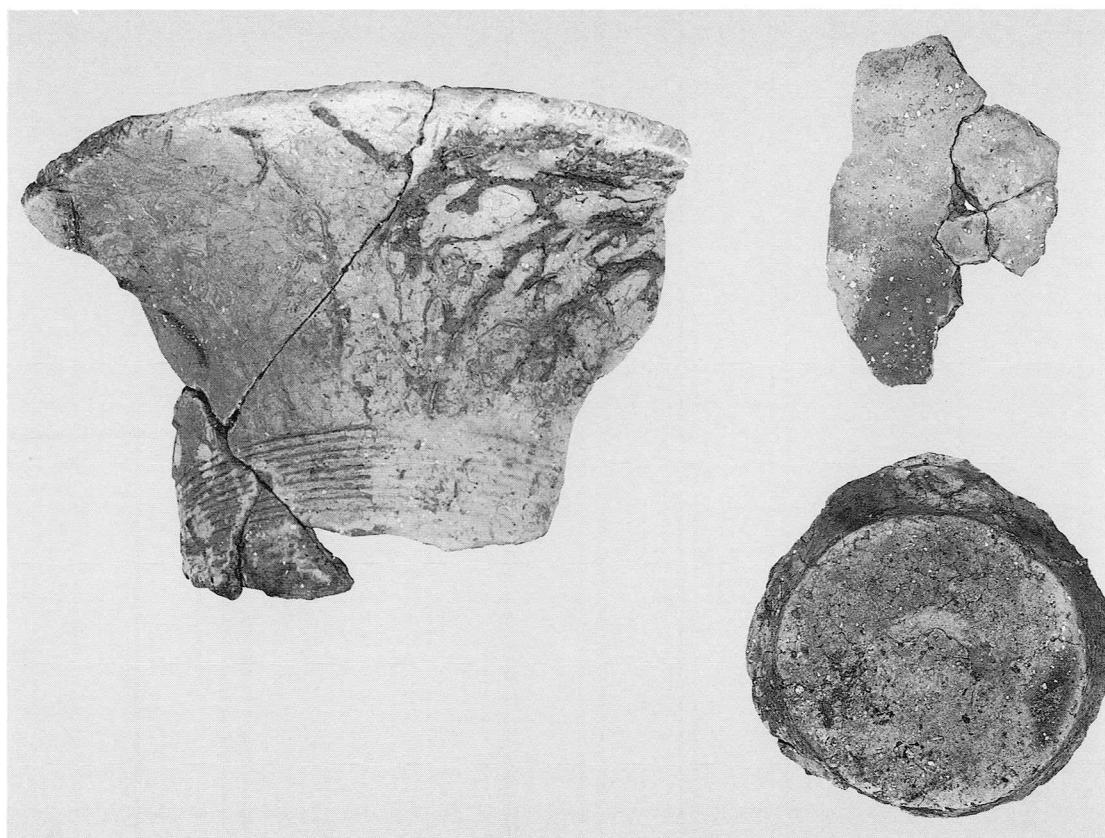
溝2 西壁断面



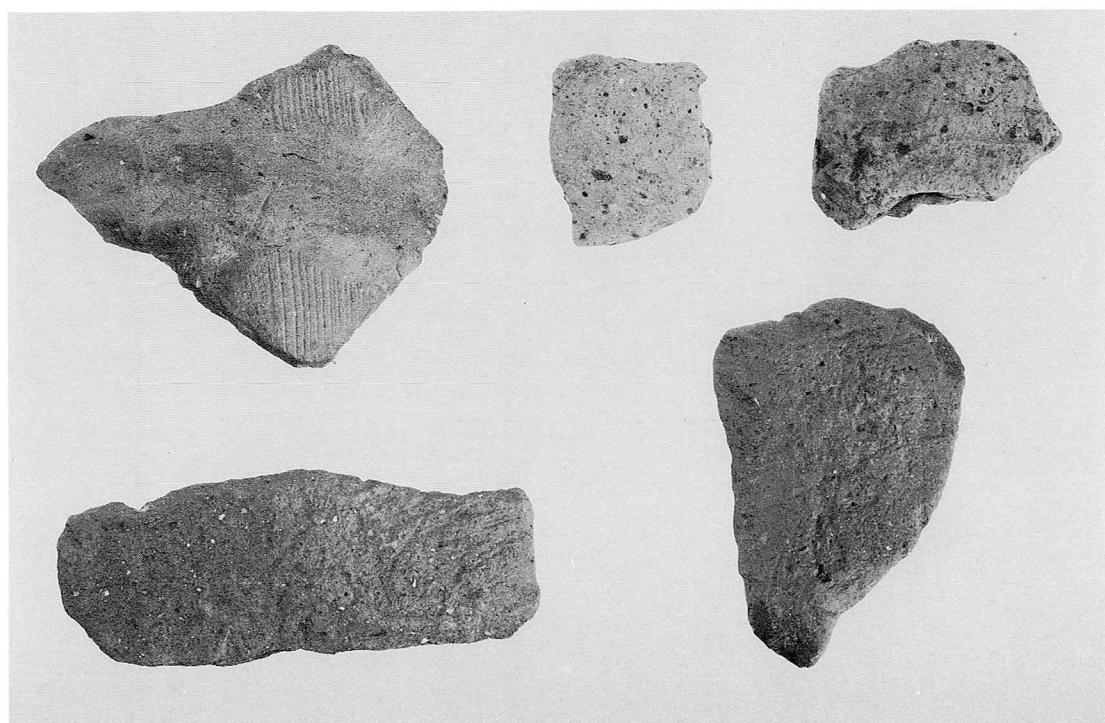
土壤6 完掘状況



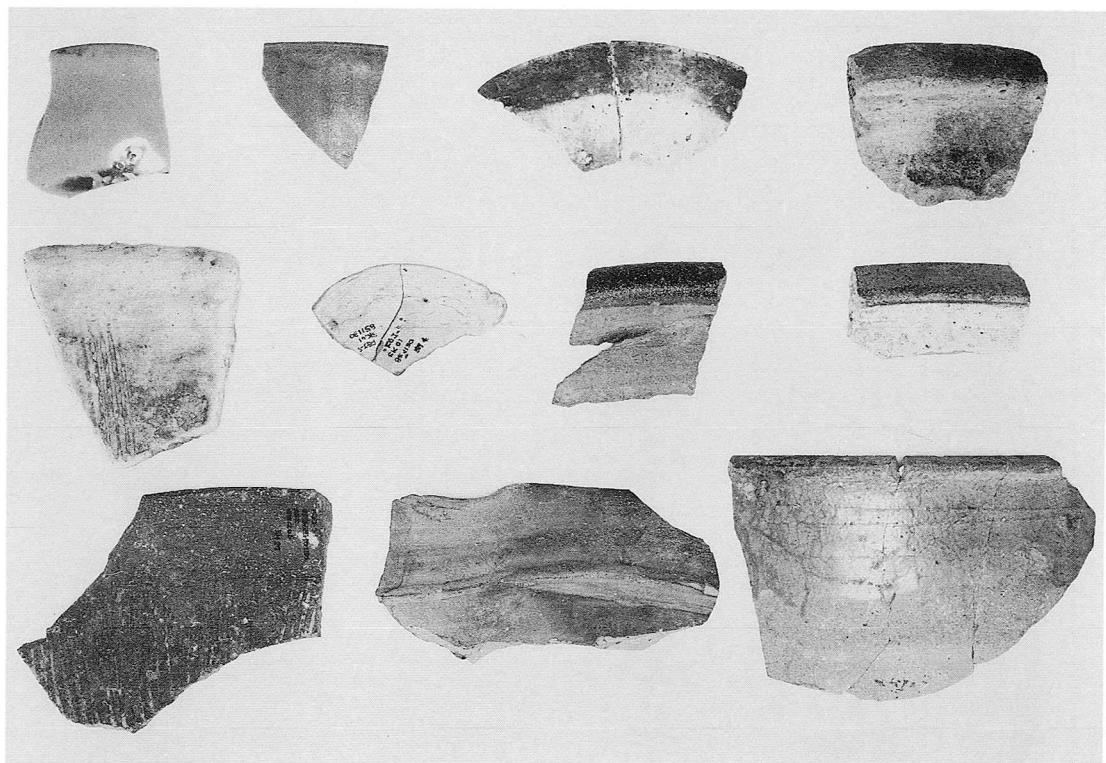
土壤6 遺物出土状態



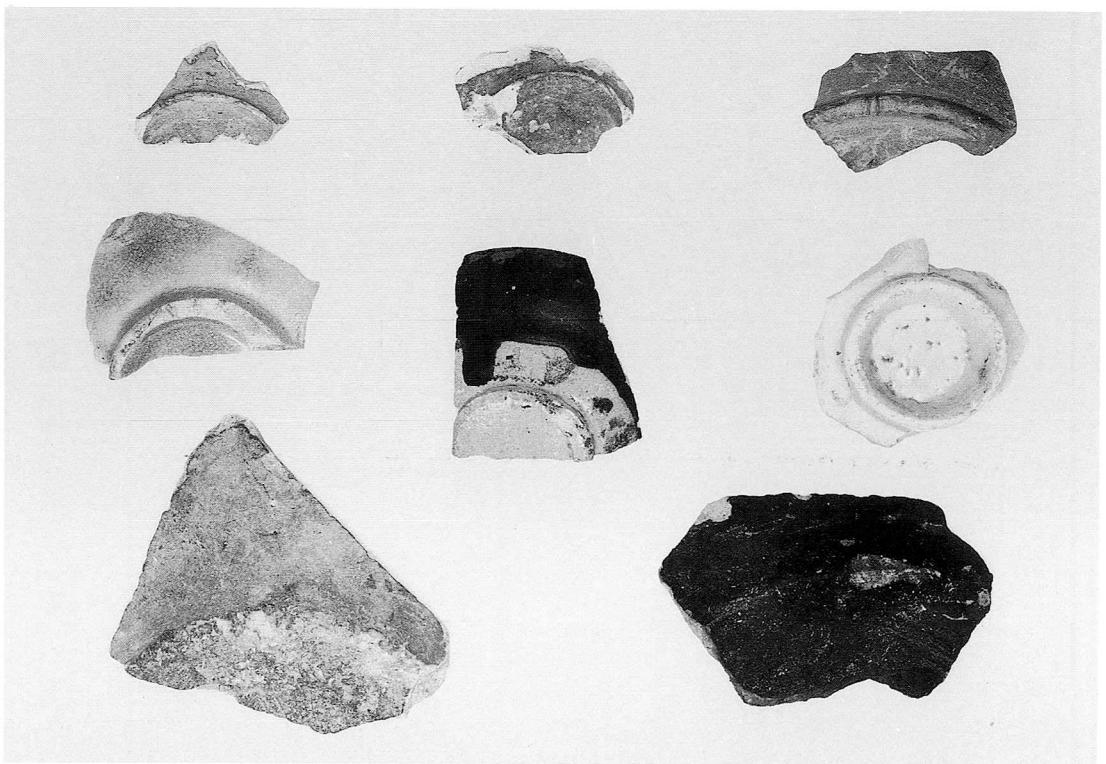
弥 生 土 器 壺



円 筒 塙 輪



出土土器



出土土器